鍵盤に魔法を 4

調律師 鈴木均が語る

# 作曲家の降臨待つ調整時間

## リハーサル

リハーサルは多くのピアニストにとって、初めてのホール、ピアノに慣れる準備運動の時間です。ところが世界トップクラスのごく一部の演奏家に立ち会うと、作曲家からのダウンロードを待つ調整時間に見えてくることがあります。キーシンがまさにそうでした。

一般的に、夜のリサイタルでは昼からホールを借り調律の後にリハーサルをすることがほとんどです。ツアーで同じ曲を弾いているので「場当たりだけでいい」とか、次のツアーの曲を練習する人も多いです。

キーシンは夜公演でも朝9時からホールに来て午後1時までリハーサルをし、お昼を食べて昼寝して、また5時に来て客入れまで弾いていました。当日のプログラム以外は一曲も弾かず、一音一音、フレーズごとに、F1レーサーがカーブや路面を確かめているような雰囲気でした。

ピアニストのエフゲニー・キーシン（2011年撮影）

朝からまるっとホールを一日借りるのは、主催者にとって余計にお金がかかります。それが当然と受け入れさせるのは、パフォーマンスが桁外れだからです。

そこからの本番は作曲家と交信する時間です。神事で太鼓や鈴が威厳を失ってはいけないように、作曲家が降りてくるための道具のピアノが万全でなければなりません。

ところで、10年ほど前に台湾でキーシンを聴く機会がありました。リストの「巡礼の年」で、「こんな大曲弾かれたら自分（の調律）でも狂わされちゃうな」と思っていたら、5分もしないうちに音程が狂い始めました。

日本だったら途中でピアニストが引っ込んでしまうレベルですが、本人はお構いなしに弾き続ける。休憩中にやり直しても、3分もしないうちにビロンビロンに狂い始めました。

終演後は拍手喝采でスタンディングオベーション。あんなに音の狂ったピアノでリサイタルを聴いたのは初めてでしたが、キーシンが中断もせず最後まで弾き切ったのは、行く先々でよくあることだからでしょう。あの時に比べたら、「俺は何とか耐えられたな」と思いました。

（聞き手・南拡大朗）

中日新聞朝刊　2024.08.17 記事より